

複式校同士の無理のない連携で 外部の視点を効果的に活かす

北海道 倶知安町立西小学校榊山分校

北海道 ニセコ町立近藤小学校

北海道の隣接する二つの町にある西小学校榊山分校と近藤小学校は、共に複式学級を有する小規模校だ。子どもや教師の実態から必要性の高いテーマに的を絞り、研究を進める。校内でも互いの連携でも意見を率直に出し合える体制を築くことで、研究を活性化させている。

課題

>> 西小学校榊山分校

児童数30人。教員数10人で、30代が多い。

◎異動により複式授業のノウハウが不足

西小学校榊山分校には海外で教育を受けてきた子どもが多数在籍しており、学習環境の差が生み出す学力差が課題として挙げられる。また、2009年度に半数以上の教員が入れ替わり、複式学級の経験者が減った。複式学級では、ある学年の指導時にもう一方の学年は教師が直接指導しない「間接指導」となる。しかし、一方の学年に活動内容を的確に明示できないまま、一方の学年を指導することもあったという。

「最終的には、間接指導時に教師が細かく指示しなくても、自主的に学ぶ力を子どもに付けることを目指し、まずは間接指導を充実させたいです」と村井満校長（当時）は語る。

>> 近藤小学校

児童数19人。教員数7人で、40代が多い。

◎語彙力や表現力の強化が課題

近藤小学校では、担任は全員、複式学級の経験があり、複式学級独自の指導法は蓄積されていた。課題は、子どもの語彙力や表現力の不足だ。同校には全国各地から移住してきた家庭の子どもが多く、積極的に人とかかわり、意欲的で活発な子どもが多い。小規模校の子どもは内向的だと言われるが、同校では当てはまらない。

それでも、河田茂校長は「限られた人々と接するためか、子どもが自分の意思を伝える語彙が少なく、『楽しい』『楽しくない』といった決まった表現が多いと感じます」と話す。

*児童数、教員数などは取材時（2010年3月）のもの



長谷川 徹
Hasegawa Toru
倶知安町立西小学校榊山分校
研究担当、特別支援学級担任。「子ども一人ひとりをよく見て、その子どもが必要としていることをしていきたい」



滝澤 祐司
Takizawa Yui
倶知安町立西小学校榊山分校教頭
「子どもと教師との温かな人間関係を基盤に、子ども一人ひとりが活躍できる授業づくりが出来る教師を育成したい」



村井 満
Murai Mitsuru
倶知安町立西小学校校長
「すべての人間は、適切な環境を与えられれば成長し続ける存在である」

*プロフィールは取材時（2010年3月）のものです

S c h o o l D a t a

北海道倶知安町立西小学校榊山分校

◎校区には国内有数のスキーリゾート地があり、海外からの観光客の激増に伴い、外国からの移住者も増加。国際的な家庭に育つ子どもも多い、国際色豊かな分校。10人の教職員のうち2人は海外の日本人学校で教壇に立った経験がある。



校長 徳光 茂先生（2010年4月から）

児童数 27人 学級数 5学級（うち特別支援学級2）

所在地 〒044-0078 北海道虻田郡倶知安町字榊山109

TEL 0136-22-0988

URL <http://www.hirafu.net/~kabayama/>

公開研究会 2010年10月8日（金）

*2010年4月時点

つづけたくなる授業研究

成果

◎子どもの変化

- 間接指導の時に、**子ども自身が学習過程を意識**して、次に何をすれば良いのか分かるようになった（西小学校樺山分校）
- 「読む力」「書く力」など、各学級の**重点指導目標とした力が向上**した（近藤小学校）

◎教師の変化

- 学習過程を意識して授業をするようになり、**授業形態が統一**された（西小学校樺山分校）
- 児童に不足している力を意識して指導することで、**指導のポイントが明確**になった（近藤小学校）
- 2校の連携によって、指導の改善がより進んだ。人間関係も深まった（2校共通）

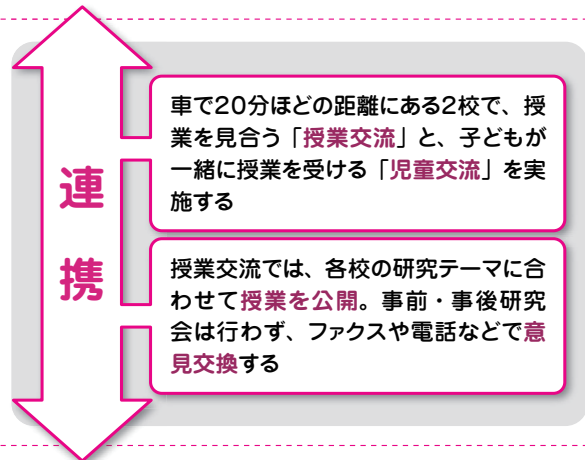
成果を支える要因

- 必要感のある研究テーマを全員で共有
- 少人数だからこそ頑張る
- **子どものために、遠慮せず意見を交わす**
- **気張らない取り組み**を行う
- 教師一人ひとりを尊重する管理職の支援

研究のねらいと取り組み

>> 西小学校樺山分校

- **算教科を中心**に、「確かな学力を身につけ、互いに高め合う授業の改善」を研究主題に
- **間接指導を含んだ「つかむ・かんがえる・まとめる・ふかめる」学習過程の明確化と定着**を目指す
- 年数回、講師を招いた研究授業を実施



>> 近藤小学校

- **国語科を中心に「言語能力を高める授業のあり方」**を研究主題に
- 6年間を見据えて児童に付けたい力を明確にし、**各学級の実態に合わせた重点指導目標を設定**
- 全教師が、前期と後期で1回ずつ授業公開。前期の成果を踏まえて後期の目標を見直す



二セコ町立近藤小学校
児玉瑞佳 Kodama Mizuka
 研修担当、1・2学年担任。「子どもたちに確かな学力を付けさせるために、最大限の努力をしたい」



二セコ町立近藤小学校校長
河田茂 Kawada Shigeru
 「校長として、先生方の共通理解を図って仕事していくことを大事にしたい」

*プロフィールは取材時(2010年3月)のものです

S c h o o l D a t a

北海道二セコ町立近藤小学校

◎1902(明治35)年の開校以来、100年以上の歴史を持つ。校区の基幹産業は農業だったが、近年は全国各地からの移住者が増加し、今では地域住民の約半数が農業以外の職業に就く。校区内の全94戸がPTA正会員となり、地域ぐるみで学校を支えている。



校長 河田 茂先生

児童数 19人 学級数 3学級

所在地 〒048-1542 北海道虻田郡二セコ町字近藤266

TEL 0136-44-2852

URL <http://www.town.niseko.hokkaido.jp/kondo-s/>

公開研究会 2010年度の日程未定

*2010年4月時点

研究のねらいと取り組み

西小学校樺山分校

「セルフタイム」を含めた学習過程を明確化

西小学校樺山分校（以下、樺山分校）が目指すのは、「学習内容や取り組みの手順を明確にし、児童が主体的な活動を通じ、理解・解決できたことを実感できる授業」「児童の発言や活動の場を保障し、児童同士・児童と教師の関わりが見える授業」だ。2009年4月に瀧澤祐司教頭と研修担当の長谷川徹先生がこの実現に向けた学習過程を提案。複式授業の要となる間接指導を「セルフタイム」とし、教師・児童共に定着を図った（図1）。

研究は、子どもが「できる・わかる」を実感しやすい算数を中心に、同年5月に校内で授業を見合うところから始めた。この年は樺山分校が「後志へき地・複式教育研究発表大会」の会場になったため、低・中・高学年で各1人、複式指導の経験豊富な他校の校長らにアドバイザーを依頼し、年3回、研究授業を見てもらった。アドバイザーからの助言が教師の意欲につながったと瀧澤教頭は話す。「アドバイザーは毎回、授業や子どももの良くなった点と共に、新たな課題を指摘してくれました。その時々々の成果と課題を明確に出来たことが、先生方の意欲につながりました」

図1 西小学校樺山分校の複式学習過程（1時間）例：3・4年生

3年生の学習過程	指導	段階	段階	指導	4年生の学習過程
1. 前時や関連単元の想起 2. 問題提示 3. 課題把握 4. 解決の見通しを立てる	直接指導	つかむ	ふかめる	間接指導	1. 習熟 2. 振り返り、自己評価 セルフタイム
1. 自力解決 2. 友だちと考える 3. 別の自力解決方法を考える 4. 発表準備 5. 発表 セルフタイム	間接指導	かんがえる	つかむ	直接指導	1. 前時や関連単元の想起 2. 問題提示 3. 課題把握 4. 解決の見通しを立てる
同時間接 [教師の見取り]					同時間接 [教師の見取り]
1. 出てきた考えを比べる 2. 正しい考え方、解き方を つかむ 3. 規則やきまりを見つける 4. 課題を振り返って まとめる	直接指導	まとめる	かんがえる	間接指導	1. 自力解決 2. 友だちと考える 3. 別の自力解決方法を 考える 4. 発表準備 5. 発表 セルフタイム
1. 習熟 2. 振り返り、自己評価 セルフタイム	間接指導	ふかめる	まとめる	直接指導	1. 出てきた考えを比べる 2. 正しい考え方、解き方を つかむ 3. 規則やきまりを見つける 4. 課題を振り返って まとめる

*間接指導=セルフタイム

■セルフタイムの確認事項

- セルフタイムのルールを確認する
- 活動時間を意識した取り組みをさせる
- セルフタイム直前の直接指導時において、課題と活動内容を確認、板書する
- 課題にあった活動内容を、学年に応じた言葉を使って提示する

■セルフタイムのルール

- 課題はOK？
- 友だちに相談OK！
- ヒントをもらってOK！
- リーダーさん、お願いします！

近藤小学校

学級ごとに言語力の重点指導目標を設定

近藤小学校が研究時に意識したのは、6年間の系統性だ。教師のアンケート結果を基に、「言語活動における学年別目標」を「読む・書く・話す・聞く」の4技能別に作成。更に、学級ごとの実態に合わせて年間の重点指導目標を設定した。研修担当の児玉瑞佳先生は、「本校は少人数ですから、学級目標は個々の子どもの目標に近い内容です。言語力を高め、それを土台に表現力を培うというように、個

連携

1校では足りない点を補完し合う

複式学級を有する学校は近隣では両校しかなく、研究を深めるために約6年前から2校での連携を開始。互いに授業を見合う「授業

人の課題に合わせて2〜3年計画で進めていきます。子どもが全校児童の前で発表する機会を設けるなど、国語に限らず、日常的な活動にも言語活動を取り入れています」と話す。研究授業は学級ごとに、前期と後期の年2回実施。前期終了時に成果を踏まえて目標を修正し、後期の研究につなげた。

つづけたくなる授業研究

図2

連携の概要

○授業交流

互いの授業を見合う教師同士の交流。通常の授業をしなごらのため、1校につき低・中・高学年の3日間に分け、もう1校は少し時期をずらして行う。通常は年1回だが、09年度は榊山分校が「後志へき地・複式教育研究発表大会」の会場となり、その準備のため年4回実施した。

○児童交流

両校の子どもと一緒に、体育や音楽などの授業を受けるもの。普段は出来ない多人数でのサッカーなどを楽しめる機会だ。榊山分校が授業交流を担当する年度は近藤小学校が児童交流を担当するといった具合に、交互に主催するシステムになっている。

◎成果

子どもの姿が徐々に変化

榊山分校では09年4月当初、間接指導の時

交流」と、子どもが授業を一緒に受ける「児童交流」だ(図2)。授業交流では、事後研究会は設けていない。ファクスで質問などを送り合ったり、電話で話し合ったりしている。「その日の最後の時間に公開授業を設定するのではなく、通常の授業を見てもらうため、見に来た先生に残っていただき時間をかけて研究会を開くわけにはいかないからです。堅苦しい形にするよりも、気軽な感じの方が長続きすると思います」(近藤小学校・児玉先生)

に子どもがざわつくことがあった。何をしたら良いのか分からず、戸惑う姿も見られた。だが、研究を進めるうちに、子どもの様子が徐々に変わったと長谷川先生は語る。

「変化が顕著に表れたのは10月ごろでした。教師が学習過程を確立するにつれて、子ども自身が学習過程を意識して、間接指導の時に何をすれば良いのかが分かるようになっていきました。間接指導でも、子どもは集中して黙々と学ぶようになりました」

一方、近藤小学校では、学級ごとに設定された重点指導目標に合わせ、不足している力の底上げが出来た。例えば、1年生には話す内容や話し方を指導し、徐々に子ども自身に考えさせていく小さなステップを踏ませた。この結果、09年度の修了式で全校児童が1年間の反省と次年度の抱負を発表した際、1年生も下書きなしで言えるようになった。

「低学年の子どもは高学年が発表する姿を見て『あのようになりたい』とあこがれを抱きます。上級生が身近な存在になる小規模校の良さです。教師にとっては学級ごとの重点目標を設定することで、ポイントを明確に指導できるようになりました」(児玉先生)

教師の指導改善のきっかけに

両校の連携は、複式学級の経験の浅い榊山分校の教師にとっては、経験豊富な近藤小学校からノウハウを吸収し、他教科の複式指導

について学ぶ機会となった。長谷川先生は、「小規模校では、教師も外部との交流が不足しがちです。指導力向上のためには他校との連携が欠かせません」と話す。

近藤小学校にとっても意義は大きい。児玉先生は、「普段何気なく行っている声掛けやノートの取り方の指導などについて、榊山分校の先生から質問されたことで、自分の指導を見直すきっかけになりました」と話す。

◎成果を支える要因

必要性の高いテーマを全員で共有

榊山分校では、間接指導の充実という喫緊の課題を研究テーマとしたことが大きい。

「『やらされ感』のある研究に意欲はわきまません。授業の質が高まり、子どもの力が付いてきたと実感できる研究にすることが大切です」と村井満校長(当時)は話す。必要性に加え、研究テーマを分かりやすい言葉で年度初めに共有したことも、研究活性化の要因だ。「4月に全員で目指す授業の姿を共有しました。初めに全員の気持ちをそろえられたことで、職員室で話題づくりがしやすくなり、同僚性も高まりました」(長谷川先生)

教員数が少ないからこそどの教師も頑張っている、近藤小学校の河田茂校長は話す。「小規模校では、教師は毎日全員の子ども

と接します。教材であれ日常会話であれ、常に新しいものを出していかないと、子どもに飽きられてしまいます。自ら必要性を感じ、休みの日は積極的に外部の研修へ出掛けて校内で共有することが、本校では日常となっています」

遠慮せず意見を言い合う

両校に共通する持ち味の一つは、自由に発言できる雰囲気にある。それは、両校の連携においても同様だ。双方の授業について、時には「こうした方が良かったのでは」「私ならこうします」という厳しい指摘もある。もちろん、信頼関係があつてこそ出来ることだ。09年度は榊山分校での研究大会があり、その運営を近藤小学校も手伝った。何度かの懇親会も経て、より関係が深まったという。榊山分校の村井校長は、「研究のためだけでなく、人間同士の付き合いがあつて初めて連携は長続きすると思います」と話す。

榊山分校の長谷川先生は、「他校の先生に授業を見せるといふと緊張と思いますが、両校においてはそういうことは全くありません。普段の授業を見てもらい、本当に役立つアドバイスが欲しいからです」と言う。

一人ひとりを尊重しながら管理職が支援

両校とも、校務分掌に関係なく、教師は気付いたら率先して動き、学校を動かしている。

近藤小学校の児玉先生は、「校長が教師個々の独自性を大切にしてくれるので、各自が得意分野で力を発揮できるチームになっています」と話す。また、担任1人に任せすぎないことも大切にしている。榊山分校の瀧澤教頭は、「先生方を尊重する一方、任せすぎずに教師全員で取り組むことも大切にしています。そして、先生が迷ったり悩んだりしている時には、積極的に助言しています」と話す。

各校の研究成果が現れている一方で、複式校ならではの課題が浮上している。単元指導（A・B年度方式）の見直しへの対応だ。単元指導は、理科や社会科などで2学年同じ内容を指導するもの。例えば、5年生が6年生の学習をするなど、2学年分の教育課程を組み替え、A年度とB年度の2年間をかけてすべてを履修する方式だ。北海道では、学校の統廃合や児童の転出・転入の時に未履修分野を出さないようにするため、出来るだけ学年別の指導に変えていく方針としている。「学年別の指導になると、学年に1人しか子どもがいない場合、1人で理科の実験や社会科の体験学習をしなければならぬことも考えられます。それでは子ども同士のコミュニケーションに広がり生まれません。小規模校の実情に合わせて、柔軟な対応を考えていくことが大きな課題です」（近藤小学校・児玉先生）

近藤小学校河田校長が重視する

校長としての役割

私が大切にしているのは、先生方の輪です。私はクッションかスポンジか、そういう立場で動いていこうと思っています。先生方が研究を進められる原動力は、子どもが変わる姿を目にし、成果が上がっていると実感できることです。

もう一つ、地域とのつながりが強い本校は、地域から期待されています。これも先生方のエネルギーになっているかもしれません。学校評価の結果から課題を発見し、それを解決していくことを大事にしていきたいと考えています。

榊山分校村井校長が重視する

校長としての役割

私は西小学校本校の校長と兼務しており、榊山分校に常駐しているわけではありません。そのため、私が意識的に行っているのは、学校に出勤した時には、子どもの成長はもちろん、先生方が頑張っている姿を見つけ、その機会を逃さずに評価し、賞賛することです。

人は大人であっても、自分の納得できたことを褒められればうれしいもので、次への意欲に結びつきます。先生方が気持ち良く、更に積極的に研究が出来るように配慮したいと考えています。